

として正式にスタートした。先遣隊が入所した五月一日は、金木町芦野公園では観桜会初日であった。同年の五月五日までに待機していた全隊員の入所が完了した。入所を完了した若者ばかりの隊員は毎日芦野公園に出かけ、桜の満開に酔いしれ、改めて金木町の自然の美しさを感じ取った。

当時敗戦国は日本の社会は非常に治安が乱れており、町内には食糧もなく水田農家でさえ米の供出で苦しんでいた。強権発動する政府の役人が家々を調べて回った。隅々まで調べられ、隠してある米は少しの量でも摘発され供出させられる。米農家でさえ米がない時代であった。食糧、衣類、履き物全て、物と引き換えに全くない時代であった。まして住宅など手にはいるはずがない。町内に生活する人々は食糧を求めて片田舎の農村に食べるものを求め、ヤミの担ぎ屋があふれる激動の社会だった。水田農家でも米を供出し、馬鈴薯や南瓜などを主食にする家もあった頃である。

私たち開拓者も同様に馬鈴薯や南瓜を、開墾するとすぐ作付けした。修練中の四月までの一年だけ安い公務員並みの月給が支給されたが、一年後食糧増産隊開拓は解散し開拓農家となり、本当の苦しい生活が待っていたのである。今度は自分達で考えて生計を立てねばならなかった。自分たちの実家から米を貰ってこられる人はまだ恵まれた方で、親も身寄りもない人は自分で原野を開墾し、木を切って薪を作り売って現金収入にしたりした。また、当時小豆が高く売れるので小豆を作付けする者も

今、六十年前を思い出し戦争に敗れた、言うなれば敗残兵だった者が、開拓食糧増産隊となり、開拓と食糧増産の国策を担ったのである。月日は過ぎ、懐かしい当時の仲間達は、ある者はすでに鬼籍に入り、また、ある者は存命はしているものも、とうの昔に離農している。今や当時を知るものは私一人と嘉瀬在住の小山内勝美のたった二人になってしまった。この土地を去った者、この世にすでに生存していない者数多くあり、かく言う私も八十一歳を越えた。

遠い昔の若い頃、誓った言葉があるので記す。

開拓者精神招魂の誓い

一つ 重い開墾鋤手に山林、原野に突撃

一つ 山砕けても心砕けじ

一つ 木枯れても心枯れじ

一つ 手老いても心は老いじ

一つ 木倒れても心は倒れじ



昭和44年当時の金木小学校大東ヶ丘分校の生徒
(上段右 原田恵喜先生・左は奥さん)

多く、米の三倍もの値段で売れるときもあり、赤いダイヤと言われた。米と交換する者や菜種が高値だと言って菜種を作付けした者もかなりいたが、三十年代になると現金を求めて開拓者達も関東方面などへ出稼ぎに行くようになったり、離農する者もいたりして時代とともに変化していった。

川倉二、三男分家開拓団

(仮称下町地区) 十一戸

昭和二十一年川倉七夕野大原野東南地区(大東農園北隣り)に金木町白川長左衛門の溜池の土手から約百五十メートル北に位置する場所である。川倉の二、三男、分家という入植者がほとんどの地区である。最初の入植者、葛西武一、白川喜乃丞、増田安雄の三名が小さな小屋を立て生活を始めていた。特に葛西家は子供が四人に両親二人、計六人の暮らしで苦労の連続の日々であった。食糧も乏しく衣類も手に入らなかった。それでも葛西氏は小さな小屋から金木町駅前的小運搬組合へ通勤していた。当時葛西氏は事務局をされていた。元警察官出身で頭脳明晰な方であったし、近所の人や青年増産隊が立ち寄っても、快く応対してくれる敬愛の人であった。また、二十五年頃には工藤銀治郎、白川勝義、斉藤勝雄、秋元孝之進、荒関甚七、工藤敏義が入植。樺太より引揚者の和田新八郎、高橋清治が入植、このころには住宅も建設される。和田家では住宅資金を直接現金で受け取り、自力で一回り大きめの家を建設した。和田、高橋両家では、子供が社会人の人も数人いて労働力もあった。この下町地区で二十七年春、朝六時頃荒関家で部落最初の火事が起きる。荒関氏本人が大火傷を負い病院へ、五歳の長男が亡く

なる痛ましい出来事だった。

後記

今回の取材に快く応じて、懐かしい郷土の昔を語ってくださった大東ヶ丘在住の方々、佐々木男治氏、小山内勝美、元分校教師清野等に心より深く感謝申し上げます。



昭和 35 年ごろの大東ヶ丘分校

津軽言葉の謎

その四、津軽語には「セ」のつく言葉や「ラ行」の言葉がない。

津軽弁には「セ」のつく言葉が少ない、「セギ」（堰）「センドク」（身なり、服装）等、数少ない。

まして、「ラ行」「リ」「レ」「ロ」のつく言葉は、探すのに苦労するほど少ない。

しかし、津軽弁では、「ン」で言葉が作られているのが多数ある。何故だろう。

(K)



嘉瀬の語ッコ 里帰り

大正月も過ぎ小正月近くになると、農家の嫁はソワソワして、落ち着かなくなる。里帰りが近いからだ。

嫁は朝早くから支度をして、夫が引く馬籠に乗って、吹雪く嘉瀬の野合いの雪道に行く、津軽の風景がそこにあつたものだ。嫁の解放感にひたれる一刻でもある。

普段シユート・シユートメにかしづいて酷使される嫁も、実家に帰ると「ユッタど手足伸ばへ」「ユッタど寝れ」「コレ食エ、アレ食エ」と、せめたてられるが、夫の家にもどれば、鬼婆アの目が光っていた。

(あきもと)

II 資料 II 故郷 大東ヶ丘の歴史

昭和二十一年四月

引揚者帰農開拓入植（上町） 食糧増産隊入植（中町）

二十一年

川倉二、三男分家型開拓団、一部引揚者入植（下町）

二十二年四月

大橋忠雄開拓団団長は三ブロック合併し、この年より大東ヶ丘芦野開拓団と名称変更した。

二十三年春

部落内道路整備工事、電気配線工事、住宅建設 同年秋頃、電気も家庭に灯る。

二十三年四月

農業協同組合法改正のため芦野開拓団を改組し芦野農業協同組合を設立する。

二十三年九月

青森県委託により保健衛生助産婦として古川つゑ氏、三十年まで保健衛生に従事。

二十四年四月

金木小大東ヶ丘分校開校（生徒数五十五名）高学年、低学年の二組複式であった。

部落内神社が田中友太郎氏発起人となって創建 神明宮出日神社と命名する。祭日は毎年七月十四日である。

二十六年秋頃

開拓団住宅建設完了し、五十五戸の部落となる。

二十七年四月

一般野菜作付から乳牛飼育による酪農、飼料用デントコーン作付。

日本専売公社より指導員が来村し葉煙草耕作が始まる。大東ヶ丘葉煙草耕作組合設立。吉田義治氏等は一反歩前後の作付であった。また、三十年頃より二十戸ほどの葉煙草作付農家が八反歩前後作付。平成十七年現在は三戸だけになった。

二十八年春頃

部落内入り口付近に白川政吉氏等発起人となり村地蔵、百万遍、庚申様安置する。

三十一年四月

離農農家 青森県より離農資金が支払われた。また、離農地は残留開拓組合員に安価で分配された。

二十三年春頃

県農林課補助金で金木川上流より水管埋設し、動力機械で水を引き簡易水道完工。後年金木町上水道給水まで部落民が利用した。

三十三年

大東ヶ丘分校体育館建設。教職員住宅増設。

三十四年春頃

大東ヶ丘婦人ホーム建設（工藤安衛門跡地）。地区の集会、防災指定場所、交流、保健指導の会場として平成八年まで部落民が利用した。

三十八年四月

入植後（昭和二十二年）建設住宅が老朽化し、自力で家を建てようとする。住宅建築資金の手当てが問題だったが低所得者住宅支援事業で、三間×四間の住宅が数戸建設された。

三十九年

金木小学校大東ヶ丘分校 学校給食始まる。

四十年

大東ヶ丘開拓、農業協同組合開拓農地、山林等が全般国土調査したため地番変更。

金木小学校大東ヶ丘分校 学校プール完成。

四十三年春頃より

部落内道路拡張 路盤整備工事着工。中町と下町の境界が毎年春の雪解け、秋の大雨でいつも決壊する。その場所を整備されたおかげで、その年の秋頃より部落民は安心して生活した。

四十五年頃

金木営林署 金木山閉鎖となる。

四十八年春頃より

部落内舗装工事及びU字溝設置工事完工

同年五月一日付けで芦野開拓団農業協同組合が解散した。

四十九年四月

フィールドアスレチック開園（元田中松太郎氏・佐々木男治氏所有の畑地、買収と一部賃貸。三町歩の広さだった。）

西北五、弘南地区からも大勢の人々が訪れていた。五十九年十一月で開園。開園して十年だった。

五十二年三月

金木小学校大東ヶ丘分校閉校。四年生二名、三年生一名で閉校式をした。

五十五年

金木町出身の県議会議員花田一氏が三上直太郎氏所有の農地八反歩の畑地を買収し、大東ヶ丘サントピアホームを建設する。

金木町昭和町から大東ヶ丘まで道路舗装工事完了、現在に至っている。

平成九年

大東ヶ丘婦人ホーム老朽化のため大東ヶ丘コミュニティ消防センター建設。集会、防災指定場所、交流の場所として部落民が現在利用している。県営山間地域総合農整備事業により大東ヶ丘農村公園ができ遊具など設置され現在に至っている。

わがふるさと(金木町)の歴史を探る

一三三三年より一六九八年までの年表

木村治利

一、神社 (所在位置は番号地図に記載)

①	金木八幡宮	郷社金木	一五二一〜二七六永年 間
②	三柱 神社	村社川倉	一六六八寛文八年正保年 間 (一六四四〜四七)の説もあり
③	不動 宮	別社不動林	一六八〇延宝七年今須村より遷座
④	愛宕 宮	別社金木	一六八一延宝八年再建
⑤	神明 宮	別社金木	一六五九万治二年再建
⑥	保食 神社	村社藤枝	一七〇四〜一〇宝永年間勧請
⑦	金比羅 宮	無格社蒔田	一六一五〜二三元和年中勧請か
⑧	嘉瀬八幡宮	村社嘉瀬	一五七二元龜三年安土桃山時代再 建
⑨	磯崎 神社	村社小栗崎	一六三三寛永一〇年再建
⑩	磯崎 神社	村社中柏木	一三四二〜四四康永年間村と共に 創建と伝わる

二、寺院

⑪	熊野 宮	村社喜良市	一五八四天正十二年安土桃山時代 再建さる
⑫	円生川上神社	無格社喜良市	一六五八万治元年〜六一寛文元年 万治〜寛文の頃勧請
⑬	立野 神社	村社喜良市	一六七二寛文十二年再建
⑭	保食 神社	無格社嘉瀬	一八〇四〜〇七文化年間俗称馬頭 観音
45	保食 神社	無格社金木山 道	
46	山 神	金木山道	
47	稻荷 神社	無格社喜良市 野崎	
48	磯崎 神社	嘉瀬雲雀野	

15	金木山雲祥寺	曹洞宗金木一五九六慶長元・繁翁茂和 尚開基
16	金竜山南台寺	眞宗大谷派金木一五九一天正十九・休 西坊開基(生玉角兵衛)
17	青蓮山妙乗寺	日蓮宗金木一七一四正徳四・荒関利右 工門により川内村より金木に移転
18	朝日山照蓮院	浄土宗金木一六九四元禄七・浄頓法師 開創
19	嘉瀬妙光庵	浄土宗嘉瀬一七一六〜三五享保年間・ 古い時代の由緒ある庵寺
20	喜良市山小林寺	曹洞宗喜良市一七一四正徳四・数度の 火災にあい古い記録焼失
	嘉瀬 明誓庵	眞宗・不祥
	藤枝 紫雲庵	浄土宗・享保の頃創立と伝わる

四、民間信仰

36	湯の沢 (隠れ切支 丹の住居跡と思われる)	40	川倉観音
37	十二本ヤス	41	藤の滝
38	川倉地藏尊	42	十和田神社
39	嘉瀬観音	43	七ツ滝
		44	嘉瀬いごく穴跡

五、その他伝承・伝説史跡等

(佐野駒三郎氏より提供)

- イ 男源常盛、女源常盛(川倉)古墳
- ロ 牧場別当の林(牧場と金木八幡宮の発祥の地)
- ハ 渡り
- ニ 水取沢・舟巻沢 (飲料水を積出したところ・当時の船着場)
- ホ 屋型森(弁慶の石)
- ヘ 前方後円墳及横穴住居跡(先住民の住居跡)
- ト 雲祥寺(五輪の塔)
- チ 袖柳(金木発祥の地)
- リ 弥次兵衛屋敷(中柏木)
- 又 喜良市の館こ(館穴多数あり)

三、遺跡、文化遺産

21	千苅遺跡	29	金木城址
22	相野山遺跡	30	小田川城址
23	芦野遺跡(1)	31	嘉瀬城址
24	芦野遺跡(2)	32	嘉瀬東館跡
25	妻の神遺跡(1)	33	嘉瀬西館跡
26	妻の神遺跡(2)	34	中柏木城址
27	藤枝遺跡	35	下の切道跡
28	坂本遺跡		



ル 倉しけ台 (館穴多数あり)

オ 川口港跡

ワ 吉田松陰昼食の場所

カ ニツ 森 (古墳)

ヨ 人丸崎 (嘉瀬清久溜池東側)

1333年より、1698年まで わがふるさとの 年表



西 暦

年号

記 事

一三三三

元弘三

鎌倉幕府滅亡、北条高時ら死に北条氏滅ぶ。

一三三四

建武元

建武の新政はじまる。

一三三六

延元元

足利尊氏幕府を開く。(南北朝時代始まる)

一三四三

康永二

安部貞秀が作成した地図に、中柏木・嘉瀬・小田川等が記載される。

一三四二〜四四

康永元〜三

村社中柏木磯崎神社、村と共に創建と伝わる。

一三四四

興国五

朝日左エ門尉安(藤原景房)飯詰高楯城築城す。

一三四七

興国八

嘉瀬光明宗範に、嘉瀬山に支城築城を命じる。

一三七八

天授四

朝日左エ門尉は、浪岡城主九代北畠頭村の幕下頭村は、親房の子孫と伝えられている。浪岡を拠点に付近一帯を支配していた。

一四六七

応仁元

応仁の乱

一四九一

延徳三

津軽始祖光信公種里へ入る。久慈姓、南部守行の家来、久慈から三六人の武将を率いて種里へ。安部氏、南部氏に敗れ、蝦夷地松前へ退く。

一五二一〜二七

大永年間

郷社金木八幡宮勧請、浪岡城主北畠永郷建立

一五四三

天文一二

鉄砲伝来(種子島へポルトガル人が伝えたという)

西 暦	年 号	記 事
一五五〇	天文一九	津輕初代藩主為信、赤石城で出生 (寛政重修諸子譜)
一五六七	永祿十	石川城攻略
一五七二	元龜三	嘉瀬八幡宮再建(安土桃山時代) さる。
一五七三	天正元	室町幕府最後の将軍義昭、宇治槇 島に兵を挙げ、織田信長に敗れ、 室町幕府ほろぶ。
一五七八	天正六	為信浪岡城を攻める。浪岡城落城 北畠頭村自害滅ぶ。 飯詰高樞城主、朝日左エ門尉行安 (藤原景房)、為信に抵抗、十数年、 その間数回に渡り、大浦為信の攻 撃を受け乍らも、「節に屈せず」孤 立無縁の辺境にあり乍ら大浦軍を 撃退した。 大浦軍兵三〇〇〇人で高樞城攻撃 に失敗した。朝日左エ門尉幕下の 金岐城津島金右エ門大浦軍に寝返 り為信騎下武将として高樞城攻撃 に参戦した。

西 暦	年 号	記 事
一五七九	天正七	朝日左エ門尉、金岐城に備えに嘉 瀬各城に命じる。 再度大浦為信軍は岩木川を下り高 樞城を正面攻撃、これに抗戦数年 という持久戦ついに敗退させた。 (八重、佐助、枯野の火を放ち) 高樞城の家臣、三上定之函は、為 信軍の再度の攻撃を予知し嘉瀬城 に使者を出し嘉瀬光明宗範に防戦 体制を命じた。 光明は、直ちに友邦八重と、佐助 を小田川城に配置し、嘉瀬東館に (現畑中北側丘陵館コ)に浜館三郎 永光を配置し、同じく西館(現八 幡宮在地)に三浦権十郎重孝を配 した。三浦の実弟三浦光兼定平を 萩元川に(嘉瀬と金木の間の川コ) 配し、幟を立て家臣拾数名、騎馬 数頭を配備し、防戦体制を整えた。 金岐城津島金右エ門は、大浦為信 の助勢を得、総力数十名の軍勢で 嘉瀬城を攻撃、萩元川で防戦体制
一五八二	天正十	

西 暦	年 号	記 事
一五八四	天正十二	の三浦兼光軍勢を不意打ちし敗退 させ、更に西館・東館へと二軍に 別れ一氣に西・東館を滅亡せんと 猪突猛進攻撃してきたが、嘉瀬西・ 東両館の三浦、浜館軍は鎧兜を身 につけ、必死に防戦、金木軍勢を 遂に撃退させた。 しかし、津島軍は再び為信の助勢 を得、五〇〇余名の軍勢で嘉瀬城 を攻撃、この時嘉瀬城の兵力二五 〇名のうち嘉瀬城に一五〇名。小 田川城に四〇名、東館二五名、西 館三五名、騎馬十五頭で応戦、多 勢に無勢なるも小田川の八重・佐 助と共に金木軍に夜襲や奇襲攻撃 をかけ、枯野原に火を放ち、つい に敗退させた。 村社喜良市熊野宮安土桃山時代に 再建さる。
一五八五	天正十三	油川の南部氏、代官奥瀬善九郎を 油川城から駆逐して、外浜一帯を 平均した。

西 暦	年 号	記 事
一五八七	天正十五	為信、尻無に本陣、津島金右エ門 を東館・西館を攻撃させる。新城 白旗城番阿部孫三郎、新城より山 越え背後より嘉瀬城を攻撃する。 東館・西館炎上、嘉瀬城・小田川 城遂に落ちる。朝日氏の義に準じ 固くな蝦夷人の強情張を見せ、八 重、佐助討死す。 西館八幡宮跡(空堀) 三浦権十郎 重孝 東館切割樞跡丘(空堀) 浜館三郎 永光 嘉瀬城現小田川温泉(空堀) 嘉瀬 光明宗範 小田川城 友邦茜長八重・佐助 飯詰高樞城落城す。 為信津輕の本領安堵の朱印状を秀 吉から貰う 奥羽一円大閣検地 忌来地村二五六石六斗 金木村 一八六石三斗 中柏木村 四石一斗二升薄市村
一五八八	天正十六	
一五九〇	天正十八	